

●プロフィール

1981年 慶応義塾大学卒業

女性総合職第1号として日本テレビ放送網株式会社入社

報道局配属

1983年 マスコミ初の女性警視庁クラブ詰め記者

1986年 マスコミ初の女性司法クラブ詰め記者

1990年 長女出産

1992年 ニュースジパングキャスター

1995年 ズームインサタデーニュースキャスター

2004年 報道番組部長

2005年 IR部長

2008年 IRセンター長 兼 経営企画部長

2012年 コンプライアンス推進室長

2014年 業務監査室長

2016年 日本テレビHD

株式会社ティップネス取締役常務執行役員

2020年 国立国際医療研究センター理事を兼任

一般社団法人 放送高度化サービス推進協会 常務理事に就任

個人的活動

Woman 50+ Network 代表

日本女性ウェルビーイング学会副代表

一般社団法人 国際女性支援協会理事

●メッセージ

初めまして、笹尾敬子と申します。1986年の男女雇用機会均等法の施行を先取りした形で、日本テレビが女性総合職の採用に踏み切った1981年に運よく一期生として入社しました。当時はまだ、大手企業の採用条件に、女性は自宅通勤、男性の補助職を堂々と謳っていた時代です。日本テレビの面接でも、「報道の仕事がしたい」という私に、「子供ができたらどうする」といった質問が堂々とされていました。当時は、若気の至りで「子供をおんぶしてでも現場に行きます。」と答えて、面接のおじさんたちから「おっー」と驚きの声が上がったのを今でもよく覚えています。その後、希望通り報道局に配属されましたが、100人はいる大部屋に女性は一人、女性が電話に出るだけで、間違い電話だと思われガチャンと切られたり、同期の男性を君付けで呼んだだけで怒られたり、びっくりすることだらけでした。記者として実績を積んで、新聞、テレビを含めてマスコミ初の警視庁詰め記者に抜擢された時も、スポーツ紙に「紅一点桜田門をくぐる」という大見出しで取り上げられ、大時代的な

見出しに本人が一番びっくりしました。その後、結婚して娘を出産しましたが、当時は、育児休業制度はなく、3か月の産休だけは認められていましたが、賃金カットのおまけつきでした。入社から40年、娘を出産してから30年、確かに育児休業制度も充実し、管理職における女性比率も当時よりは、はるかにましになっているとはいえ、女性がキャリアに見合う地位、結婚、出産すべてを手に入れるのは今でも至難の業です。力尽きて仕事をやめたり、体を壊す女性のなんと多いことか。同世代の対馬先生とは、マスコミと医療と分野は違えど同じ時代を生き抜いてきました。今回の女性財団の設立の背景には、日本が、女性が働きやすい、生きやすい社会になかなかならない、スピードが遅すぎるという憤りがあると思います。ならば自分でできることをしようという対馬先生に賛同し、微力ではありますが設立発起人に名を連ねさせていただきました。今が変わる。未来が変わるために。